

〔當世武野俗談〕音羽町石見屋おしげ

音羽町の茶や石見屋と云有其女房おしげと云ば、元にて勤めせし女なり、器量もよく、平生物静かにして多く物云ず、やさしくおとなしき生れなり、此故石見やの室とす、然るに見かけと違て大力持なり、夫を知るものなし、尤力を終に人にみせたることなし、此頃その大力を知ることあり、音羽町のうちに、角力取年寄音羽山峯右衛門といふ者あり、渠が方に若手の相撲取大勢來て居たりしが、或時角力取ども三四人連立、近所を白晝にぞめき廻りける折節、七町目蓮光寺といふ日蓮宗の寺にて、萬卷陀羅尼修行有、參詣の男女夥し、其所へ件の角力取ども參て、若き女などへつきかゝり、人の邪魔して我が樂とするたはけもの、世上にまた多し、然るに彼おしげも參詣しけるに、小女ひとり供につれて、蓮光寺の客殿縁側通に居ければ、角力取一人来て、彼女房の尻をなでけるに、知ぬふりして居たる故、猶亥やうだんをいたしける所を、頓ておしげ其手をとり、膝の下におしかい力を出しておさへければ、大ばんじやぐの如く、巖石を以ておしにからる、とも、是にはいかで増るべき、大の角力取其腕をひしげる計、骨はくだけて、みぢんに成かと思はれ、見る内に彼男色眞青になり、額に冷汗を流し、泪ぐみ物をもいはず、顔をしがめて苦しむ、おしげは顔も替らず、ふところより水晶の長房の珠數を取り出し、三寶祖師を拜み、自我偈題目を唱へて、少もさわがす居たりけるを、側より題目講中の麻上下著たる人々來て、達て侘けるゆへ、おしげはゆるしてけり、角力取は危き命を助り逃行ける、是より音羽町のおしげとて、遊客の知らざるはなかりけり、

〔類聚名義抄六〕心怯區劫反 カソル ツタナシ

〔古事記下清寧〕爾袁祁命○顯亦立歌壇、於是志昆臣歌曰、○歌如此歌而乞其歌末之時袁祁命歌曰、
意富多久美袁遲那美許曾須美加多夫祁禮、